

令和1年8月3日付・山陰中央新報

出雲 木綿街道観光 学生が調査



江戸期から明治期にかけて木綿の集積地として栄え、古い町並みが残る出雲市平田町の木綿街道交

流館でこのほど、木綿街道の観光客や住民などを対象に意識調査を実施した学生による現地報告会があった一写真。

発表したのは、県立大地域文化学科の竹田茉耶講師(30)の指導で観光まちづくり演習を履修する2年生10人。3班に分かれ、5月から現地でアンケートを行うなどしてきた。

観光客のニーズを探った班は、木綿製品を扱う土産物店の需要や藍染め体験などへの関心が高かったと報告。情報看板の設置や夜のイベント開催を提案した。

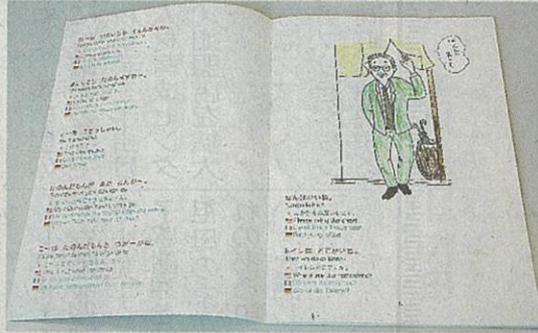
一方、住民と商業者に意識調査した班は、観光客の受け入れ意識に相違があるとして双方の話し合いの場を設ける必要性を伝えた。

また、別の班は「木綿市」の定期開催を呼び掛け、発表した中村祐希さん(19)は「木綿市で人と人がつながることで『平田の輪』が広がり、地域活性化にもつながっていくのではないかと話した。(松本稔史)

夜の松江 楽しんでごしない

東本町の
飲食店有志

出雲弁会話集作成



出雲弁の例文を紹介した
「飲食店で使える出雲弁
会話集〈居酒屋編〉」

松江市東本町の飲食店などの
経営者らでつくる「とうほん倶
楽部」（足立真智子会長）が、
居酒屋で使える出雲弁の会話集
を作成した。日本語のほか、英
語、フランス語、ドイツ語の
表記を加えており、国内外の観
光客に、地元の言葉で、夜の松
江を楽しんでもらう狙いがあ
る。

作成した「飲食店で使える出
雲弁会話集〈居酒屋編〉」では、
出雲弁で「こーをござさっしゅい」
との言葉を、日本語では「これ
をください」、英語では「Th
is one, please

英、仏、独語表記も収録

e.」とするなど、多くの例文
を紹介。出雲弁を文化として残
そうと、松江・出雲弁保存会な
どが「翻訳」に協力し、島根県
立大のダスティン・キッド准教
授も英訳を担当した。

足立会長は「出雲弁で盛り上
がれば距離が縮まるはず」と期
待。同保存会の小林忠夫会長
（80）は「会話集が話題になって、
出雲弁が広がってほしい」と話
した。

B5判、32ページで同倶楽部の加
盟店や市内の観光施設などに寄
贈。同倶楽部事務局（旨味牛た
ん玉田屋）で、300円で販売
もしている。連絡先は、085
2（25）6089。

（藤本ちあき）

多様性 尊重しあえる社会へ

障害者や健常者、さまざまな国籍の子どもたちが協力して自然活動を楽しむ「ダイバーシティ・キャンプ」が21、22の両日、かみくの桃源郷キャンプ場（雲南市大東町上久野）で開かれる。さまざまな人々と交流する場をつくり、多様な立場への理解を深め、社会に貢献できる人を増やす狙いがある。

キャンプは、青少年や視覚障害者の自然体験活動を支援する団体「しまね四季の学び舎」が、昨年に引き続き企画。

事前に申し込んだ約60人が1泊2日を共にし、テント設営や飯ごう炊飯、星座観察などを協力して行う。県立大ボランティアサークルの学生らがスタッフとして参加し、本番を

障害、国籍 関わらず交流

前に同団体代表の福田悟さん（71）から、テント設営方法の指導などを受け、準備を進めている。

同大人間文化学部保育教育学科2年の土江智也さん（20）は「子どもたちにとってすてきな夏休みの思い出になればうれしい」とし、福田さんは「どんなバックグラウンドをもっ

あすから雲南でキャンプ

た参加者でも楽しめるキャンプにしたい」と話した。

対象は小学生から中学生までで、参加費4000円。申し込み、問い合わせは福田さんまで、電話0852（22）9394。

（坂本彩子）



県立大生にテント設営を指導する福田悟さん（左）＝松江市浜乃木7丁目、県立大

性別や年齢、障害の有無などに関係なく、多様な人材が活躍する「ダイバーシティ（多様性）」という理念を掲げる組織や団体が、山陰両県で増えている。それぞれが女性活躍や国籍を超えた交流の推進を目的に活動しており、誰もが力を発揮し、暮らしやすい環境づくりに向けた動きが加速している。

ダイバーシティ職場や地域社会において、性別や年齢、人種、障害の有無といった違いを受け止め、多様な人材が活躍し



やすい環境を整備しようとする考え方。有能な人材の発掘や革新的なアイデアの喚起につながるとして、世界中の企業や研究機関で重視されている。

島根大が女性研究者支援

ダイバーシティの理念を取り入れ女性研究者の活躍を支援する文部科学省の事業対象機関に、島根大（松江市西川津町、服部泰直学長）が選ばれた。6年間の事業期間の中で、県立大など連携した「ダイバーシティ推進ネットワーク」を立ち上げ、具体的な取り組みに向けた意見交換を進め、女性研究者が力を発揮

活躍できる環境整備へ

しやす環境の実現を目指す。同大が選ばれたのは、女性研究者の割合で欧米諸国に後れを取る日本の現状を踏まえ、文科省が2015年に創設した「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ」。他の研究機関と連携しながら地域で率先して女性研究者が活躍できる環境を整え、「牽引型」と、

採用数など高い目標を設定した上で、海外派遣や管理職への積極登用を進める「先端型」などがあり、年間最大5千万円の支援が受けられる。島根大は2019年度の「牽引型」の機関に認定。県立大のほか松江、米子両高専と共同で女性研究者の育成などを目的としたネットワークを設け、結婚や出産といったライフイベントと、キャリアアップを両立させる仕組みづくりに向けて案を出し合ったり、各団体の取り組みの改善点を話し合ったりする。これらにより、19年度時点で22%にとどまる同大の女性教員比率を、24年度には24%に引き上げたい考えだ。

同大の藤田達朗副学長は「県立大や両高専と協力し、山陰の先頭に立ってダイバーシティを推進する」と力を込めた。

（佐々木一全）

子どもの運動遊び手助け

県立大教授と雲南市 指導本を共同制作

乳幼児が楽しく体を動かす運動遊びの指導本を、県立大（松江市浜乃木7丁目）の梶谷朱美教授と体育教育学専攻と雲南市が共同で制作した。同市で実践されていた豊富な遊びの事例を分析してまとめたもので、梶谷教授は「子どもたちの心身の発達を育む手助けになればうれしい」とし、活用を呼び掛けている。

雲南市は2016年、幼児期に運動を安全に楽しむ環境づくりのポイントをまとめた指導書を制作し、市内18カ所の幼稚園や保育所で実践。さらに、幼児の反応など実践例を集めて冊子にしていた。18年3月、冊子を見た梶谷教授は、有効な教材になると確信。実践例を踏まえた指導本の制作を同市に提案し、市子ども政策課の藤原洋子教育保育指導員ら3人とともに編集した。

完成した指導本「運動遊びハンドブック」では、運動遊びの時の効果的な声掛けなどを紹介。「登り棒」遊びで幼児が「先生、足持って」と発言したことなどの



制作した指導本を手に、乳幼児の運動遊びの普及を進めようと意気込むメンバー

事例から、子どもが安心して挑戦するため、どのような援助が必要かなどを解説している。加茂中央公園など、市内の自然豊かな遊び場などをまとめた地図も掲載した。

指導本はB5判128ページ、1296円（税込み）。28日午後3時から雲南市役所で、保育所や幼稚園の関係者を対象に、指導本を使った研修会を開く。問い合わせは、市子ども政策課、電話0854(40)1044。

（坂本彩子）